

らおうという運動である。例えばオランダの木管合奏団やウクライナの歌舞団などを低料金で観覧できるようにしている。これも市民に大変好評である。以上のように、私たちはレクリエーション運動が単に歌やダンスやゲームの指導といったレベルでは全く市民を巻き込んだ運動として広がって行かないことを認識している。レク指導者のレベルを高めながらも当協会が中核となって21世紀の精神面での深みのある運動へと展開してゆく必要がある。これからも更に勉強を重ね、文化の香り高いまちづくりを目指したいと思っている。

地元ジャーナリストの立場から

足立 省三

地域文化とレクリエーションについて2つの視点からお話したいと思う。

第1は、中部地方が自然公園の多い地方であり、また一方で首都圏、近畿圏にはさまれ、高速道路網が発達してきて、自然公園地域に沢山の利用者が入り込むようになった。それにつれてレクリエーション活動、特に山岳のレクリエーション活動のあり方にも多くの問題が発生してきている。

かつて山岳地帯には山岳特有の生活スタイルというものがあった。ところが現在では、中部山岳の山小屋は巨大化し、千数百人収容可能というように変化している。登山者はそれほど苦労することなくそこに到達することができる。彼らにとっては、すでに自然と人間との親密な関係を失っているのに、都会の生活と同じようなものを要求している。その結果、山岳地帯での環境破壊が深刻な問題として発生してきた。

こうした問題に対して、かつての日本の山村が保持してきた山岳における暮らしの知恵というものに注目し、それを新しい視点で評価し直すことが必要であると考えられる。野外において自然と人間との関係を取り戻せるような、また楽しい遊びやグループ活動ができるような、つまり生活体験を通したひとつの合宿拠点のようなものが必要となる。長野県大町市にある山岳自然博物館や東京教育大の活動から生まれた子供達の学習施設などはその例である。こうした自然と人間との関係を強化し、それを見直すような拠点を造っていく必要がある。

フランスで1970年に出された環境に対する100項目のレポートがあるが、その中で環境教育について、冷

えきった若者の目を環境変化に対していかに引きつけるか、ということが重要なポイントであると述べている。こうしたことも今後重要になると思っている。

もう1点は、コミュニティづくりとレクリエーションである。コミュニティもレクリエーションも住民自治につながる地域生活の共同基盤というように考えるとすれば、それに対してコミュニティ活動が広がっていく過程というのは、住民参加のしかたで2つのタイプがある。ひとつはクラブ活動型から広がっていくタイプ、もうひとつは生活環境型から広がっていくタイプである。これらを通し、地域の活動情報といったものが横につながってゆくということが最も重要である。今日の地域社会は、多くは補助金などの関係で縦割りになっているので、老人クラブや子供会などの情報は地域の中ではつながってゆきにくい。これらの互いの活動団体の情報を横につないでゆくところに重要な意義がある。これは行政においても同様であり、コミュニティ活動を新しく進めてゆく場合には、連絡会議といったものを市町村役場内に設ける必要がある。

先ほどの八王子市レクリエーション協会のお話を聞いてこれはすごいと思ったが、かつて昭和40年代に静岡県龍山村というところで森林組合が中心となって村づくりを積極的に推進した事例があるが、この中にはレクリエーションによるまちづくりという昭和50年代後半以降の新しいテーマがすでに提唱されていたと考えている。

また公共投資による市民会館建設などハードの施設づくりが増えて、いわゆるハコモノの都市づくりと言われるわけだが、これを如何に使いこなすかということで、八王子に学ぶところが大きいと考えている。地域文化を育てるような都市づくりの方向に、如何にしてもってゆくかということに対して、非常に良い示唆をいただいたと思っている。

観光・レクリエーション論の立場から

鈴木 忠義

地域、文化、レクリエーションという3つの言葉が出てくるが、確かに人間は共同社会の中でしか生きられないわけで、今日それがより高度化してきている。

しかし一方では、人間疎外の傾向が強まっているともいえる。例えば、水道ができたために井戸端会議がなくなり、各戸が風呂をもつようになったために銭湯

が衰退した。つまり地域における偶然の出会いの機会が失われたわけである。そうした中で、失ったものを如何にしてとり戻していくかということが大変重要なことと考える。

また職業というものも非常に多様化してきている。昔の農村社会であれば、誰もが自然のリズムに従って生活していたので、日が暮ればいつでも寄合などで集まることができた。しかし現在は工業化社会の中にとり入れられているので、それぞれ生活のリズムが異なり簡単に集まることができない。こうしたことから相互の疎外が発生、それが地域社会にも及んでいる。

そうしたものを1つに結びつけてゆく手段として何が残されているのかということであるが、これこそ私は地域におけるレクリエーションであろうと思っている。コミュニティ・レクリエーションという横文字があるが、地域の人たちが集って如何に楽しくすごすか、その中でコミュニケーションができるか、ということが重要なのである。コミュニティという言葉はコミュニケーションをすることから来ているわけだが、如何にしてそうした単位をつくるかが重要である。

ところで先ほどの八王子市レクリエーション協会のお話によれば、自分たちが色々訓練し練習したものを“まち”という1つの場に持ち出してきている。何事も習い自分で学ばなければ面白くないものであるが、その修得したものを「祭」というハレの場で人に見てもらおうということが、コミュニケーションにつながっている。

私は観光の問題に長く係わってきたが、“観光”という言葉は自分たちの国の光を見せる、自分たちで築いてきた生活文化を他の人に来て見ってもらう、というところから来ている。例えば、先ほど紹介していただいた様々なレクリエーションを“まち”の中にもって来て行なう。そうすると大勢の人が集まる。大勢の人から見てもらうと、人間は本質的に目立ちたがる性質があるので、益々盛んになり、レクリエーション自体の交流活動が活発化する。そうした中で相互の親睦が深まり、またその技術の中に自分自身が錬磨されてゆく。一芸に通じるものは多芸に通じるというが、芸というよりはものの考え方に通じるようになるわけである。したがって1つのことをやることの意味といったものが出てくる。八王子市の場合には、それまでの練習や学習で研鑽してきたものを、祭などのイベントの中に誰もが参加できるようなかたちで持ち込んでいる。

それがまた、自分の能力がどのようなところにあるのかといった、自己実現の一環としてのレクリエーションにもなっている。

人間疎外が進むなかで、本来の人間性を取りもどし、それを人々と分かち合う。そうした交流の楽しみのようなものが求められている。それらが結集され、ひとつの“まち”というものになってゆく。そうすると見る・見られるという関係が生まれ、大会などを開けば遠くから人々が見に来てくる。そうしたところに観光とイベント、地域や文化とレクリエーションの関係があるのではないかと考えている。

レクリエーション社会学の立場から

田中 祥子

余暇階級にある人たちが、その時代の文化をつくり上げてきた、ということがよく言われる。平安時代は貴族の時代であったし、江戸期は町民文化の時代であった。そして現代を考えてみると、もしこのまま余暇活動としてダンスとゲームだけを行うようになったら、百年後に昭和の時代を振り返ったとき、どのような文化が残されているのか、ということをもとに考えた。その昔、ローマは余暇階級がパンとサーカスのみに生きたことによって国が滅びたといわれているほど、余暇を我々がどのように使うかということが、大変重要な問題になっていると私は考えております。

本日の丸山先生のお話をお聞きして、行政を頼りにせず皆さんだけで進めてこられたことは大変すばらしいと思うと同時に、どこの町でも仲々そこまでできることではないと思いました。つまり、私はもう一度行政のあり方を考え直してほしいという提案をしたいわけです。丸山先生が、行政の中にいる限り、活動内容の狭いものになってしまうというお話をされましたが、私はむしろ縦割りの行政組織自体に地域のレクリエーションをマイナスにする要素があるのではないかと考えています。

もう1つは、行政が設置するレクリエーション施設が、例えば婦人会館や老人クラブ、児童館など年齢層に分けた空間になってきているように思われるが、本当は年齢などに関係なく、地域の人がみんな集って様々なかたちでレクリエーションができる施設がほしいわけです。そうすれば、母親が子供を連れてきて、自分のバレーボールをやっている間に、子供のプログラム